

授 業 概 要

(介護福祉科)

授業科目名 医療的ケアⅡ		授業の種類 (☐ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習)	
授業担当者 棚橋 恭子	実務経験	病院、介護老人保健施設、准看護師とし従事し 訪問看護ステーション、障害者支援施設、特別養護 老人ホームに看護師として従事した。	
授業の回数 24回	時間数(単位数) 48時間(3単位)	配当学年・時期 2年・前期	(☐ 必修 ☐ 選択)
[授業の目的・ねらい] 「個人の尊厳と自立」「医の倫理」について医療的ケアを行う立場のたつ専門職としての心構えを形成する。人の生命に直接関係する行為であることの意義と自覚について説明できる。 [授業全体の内容の概要] 授業導入時、前回の復習を行う。(口頭質問等) 医療職との連携の下で医療的ケアを安全・適切に実施できるよう、必要な知識・技術を習得することを学習のねらいとしている。医療的ケアを初めて学ぶ学生が「なぜ医療的ケアを学ぶのか」についてしっかり理解するために解剖生理学的な基礎知識から実施の際の留意点、緊急時対応など実践的な知識・技術を学び、その上で医療的ケアを安全かつ適切に実施できるよう基礎的知識を身につける。 [授業終了時の達成課題(到達目標)] 1 「喀痰吸引」「経管栄養」を安全に実施するための基礎知識を習得し説明できる。 2 個人の尊厳と自立について理解し、利用者の尊厳を守り、自立を助ける医療的ケアが実践ができる。 3 利用者の自己決定の権利・個人情報の保護、利用者や家族に対する説明と同意の意味を説明できる。			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 (15回までの場合はセル結合)			
高齢者及び障碍児・者の「喀痰吸引」概論 【1～6】 1. 喀痰吸引とは 2. 人工呼吸器と吸引 ① 3. 人工呼吸器と吸引 ② 4. こどもの吸引 5. 吸引を受ける利用者への説明、同意 観察項目		16. 喀痰吸引 実施手順④ 吸引の技術と留意点 17. 喀痰吸引 実施手順⑤ 吸引の技術と留意点 18. 喀痰吸引に必要な報告と記録⑥ 高齢者及び障碍児・者の「喀痰吸引」概論 実施手順 【19～24】 19. 経管栄養 実施手順① 器具、機材のしくみ、清潔保持 20. 経管栄養 実施手順② 経管栄養の技術と留意点	

6. 急変、事故発生時の対応と事前対策 高齢者及び障碍児・者の「喀痰吸引」概論【7～12】 7. 消化器の解剖と働き 8. 経管栄養とは 9. 経管栄養実施上の留意点 10. 注入する内容に関する知識 11. 経管栄養を受ける利用者・家族の気持ち説明と同意 12. 急変、事故発生時の対応と事前対策 高齢者及び障碍児・者の「喀痰吸引」概論 実施手順【13～18】 13. 喀痰吸引 実施手順① 器具、機材のしくみ、清潔保持 14. 喀痰吸引 実施手順② 吸引の技術と留意点 15. 喀痰吸引 実施手順③ 吸引の技術と留意点	21. 経管栄養 実施手順② 経管栄養の技術と留意点 22. 経管栄養 実施手順③ 経管栄養の技術と留意点 23. 経管栄養 実施手順④ 経管栄養の技術と留意点 24. 経管栄養に必要な報告と記録
[使用テキスト・参考文献]	最新介護福祉士全書 13「医療的ケア」 メジカルフレンド社 プリント
[単位認定の方法及び基準]	・教科出席率が80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。 1. 考查点(85%) 到達目標の修得状況を測るために、各回で実施した確認テストを編集した期末考査により算出する。 2. 平常点(15%) ・日々の授業に対しての取り組み方、提出物、参加態度などを含め評価する。(5%) ・小テスト(確認テスト含む) 確認テストの点数により算出する。(10%)

授 業 概 要

(介護福祉科)

授業科目名 介護の基本Ⅱ-1		授業の種類 (☐ 講義 ・ 演習 ・ 実習)	
授業担当者 阿部 紀男	実務経験	特別養護老人ホーム、市町村社会福祉協議会の職員として高齢者ケア全般に従事した。	
授業の回数 15 回	時間数 (単位数) 30 時間 (2 単位)	配当学年・時期 2 年・前期	(☐ 必修 ・ 選択)
[授業の目的・ねらい] 介護福祉の基本となる理念や、地域を基盤とした生活の継続性を支援するためのしくみを理解し、介護福祉の専門職としての能力を養う学習とする。 [授業全体の内容の概要] 介護を必要とする人の暮らしを理解するにおいて、その人らしさ、生活ニーズ、生活を支える社会資源とケアマネジメント、そして地域連携の概念を理解し、施設実習に必要な基礎となる知識を理論的に学ぶ。 [授業終了時の達成課題 (到達目標)] 介護を必要とする人の生活を個別に支援するという観点から介護サービスや地域連携など社会資源を活用する支援を理解できる。具体的には「生活とはなにか」「介護福祉を必要とする高齢者や障害者の暮らし」「生活ニーズ」について述べるができる。また「フォーマルサービス」「インフォーマルサービス」「地域連携」について述べるができる。			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 (15 回までの場合はセル結合)			
1. 介護福祉を必要とする人の理解 2. 私たちの生活の理解 3. 介護福祉を必要とする人たちの暮らし 4. 「その人らしさ」と「生活ニーズ」の理解 5. 生活のしづらさの理解と環境の重要性 6. 生活を支えるフォーマルサービス (社会的サービス) とは 7. 演習 8. 生活を支えるインフォーマルサービス (私的サービス) とは 9. 演習 10. 地域連携 11. 演習 12. 介護における安全の確保 13. 演習 14. 演習 15. 演習			

[使用テキスト・参考文献]	「介護福祉士養成講座 介護の基本Ⅱ」(中央法規出版) 「新版介護基礎学－高齢者自立支援の理論と実際」(医歯薬出版)
[単位認定の方法及び基準]	・教科出席率が 80%以上で、筆記試験 60 点以上

授 業 概 要

(介護福祉科)

授業科目名 介護過程Ⅱ－1		授業の種類 (☒ 講義 ・ 演習 ・ 実習)	
授業担当者 伊東 美子	実務経験	特別養護老人ホームにて、介護福祉士として介護業務に従事する。	
授業の回数 15 回	時間数 (単位数) 30 時間 (2 単位)	配当学年・時期 2 年・前期	(☒ 必修 ・ 選択)
[授業の目的・ねらい] 本人の望む生活の実現に向けて、生活課題の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得する学習とする。 [授業全体の内容の概要] 介護過程の意義・目的及び介護過程の展開の一連のプロセスに関する基礎的理解、介護過程とチームアプローチ、個別事例に通じた介護過程の展開の実践について、介護総合演習や介護実習、生活支援技術等の他科目との連動を視野に入れて、介護過程を展開できる能力を養う。 [授業終了時の達成課題 (到達目標)] ① アセスメントから、利用者の生活課題が導きだせることができる ② 生活課題を抽出し、個別介護計画が立案できる ③ 立案した個別介護計画を実践できる ④ 実践したケアについて正しく記録し、評価を行うことができる ⑤ 実習を通して、チームアプローチを理解できる ⑥ 個別の事例を通して、対象者の状態や状況に応じた介護過程の展開ができる			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 (15 回までの場合はセル結合)			
コマ数：15 コマ 1. 個別介護計画の立案について (概要) 2. 個別介護計画作成 (事例学習) ① 3. 個別介護計画作成 (事例学習) ② 4. 個別介護計画作成 (事例学習) ③ 5. 個別介護計画作成 (事例学習) ④ 6. 個別介護計画作成 (事例学習) ⑤ 7. 個別介護計画作成 (事例学習) ⑥ 8～15 帰校日指導 (個別介護計画立案)			
[使用テキスト・参考文献]		・アクティブラーニングで学ぶ「介護過程ワークブック」 (株式会社みらい) ・プリント配布	

[単位認定の方法及び基準]	・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。 1. 査査点(80%) 到達目標の修得状況を測るために、各回で実施した確認テストを編集した期末査査により算出する。 2. 平常点(10%) ・日々の授業に対しての取り組み方、参加態度などを含め評価する。 3. 課題への取り組み (10%) ・提出物やレポートへの取り組みを評価
----------------------	--

授 業 概 要

(介護福祉科)

授業科目名 介護実習Ⅱ		授業の種類 (講義 ・ 演習 ・ 実習)	
授業担当者 伊東 美子	実務経験	特別養護老人ホームにて介護福祉士として介護業務に従事する。	
授業担当者 棚橋 恭子	実務経験	病院、介護老人保健施設、准看護師とし従事し訪問看護ステーション、障害者支援施設、特別養護老人ホームに看護師として従事する。	
授業担当者 阿部 紀男	実務経験	特別養護老人ホーム、市町村社会福祉協議会の職員として高齢者ケア全般に従事した。	
授業の回数 1日8時間×25日	時間数(単位数) 200時間(5単位)	配当学年・時期 2年・前期	(必修 ・ 選択)
[授業の目的・ねらい] 知識と技術を統合し、介護過程を展開して具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を修得する。さまざまな生活の場における個別ケアの理解を深め、介護福祉士の役割について学ぶ。また、介護過程の展開について実践を通して学ぶ。 [授業全体の内容の概要] 介護実習では、個々の生活リズムや個性を理解するという観点から様々な生活の場において個別ケアを理解し、利用者・家族とのコミュニケーションの実践、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割を理解する。 個別ケアを行うために、個々の生活リズムや個性を理解し、利用者のニーズに沿って利用者ごとの介護計画の作成、実施、実施後の評価、計画の修正といった一連の介護過程を展開し、他科目で学習した知識や技術を統合して、具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を身につける。 [授業終了時の達成課題(到達目標)] ①介護とは何かを理解し、介護を実践する基本的能力を身につける。 ②専門職業人として自己をみつめることができる。			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 (15回までの場合はセル結合)			
目 的：介護福祉専門職としての価値観を高め、利用者へ総合的な援助を通して、介護計画の立案・実施・評価といった一連の介護過程のすべてを継続的に実践する。 目 標：①利用者個々の生活リズムや個別性に応じた生活支援のあり方を理解し、チームの一員として連携し、介護を遂行する能力を養う。 ②利用者のニーズに応じた介護過程の展開(立案～実施～評価)を継続的に実践できる。 ③介護福祉士を目指すものとして専門性のあり方を理解するとともに、自分自身の介護観の形成を行う。 実習方法・介護過程実習は、1日の実習を8時間とし、25日間を基本とする。 ・マンツーマン指導を基本とし習熟度をはかる。 ・実習先の勤務時間に合わせて、早番・遅番を実施し、日課表に沿った業務の進め方について学ぶ。			

	・夜勤実習を1回実施することで、介護の連続性を理解する。 ・医療的な援助に関しては見学実習とし、介護チームの一員となるための連携方法を学ぶ。 ・自立支援へと繋がる援助が提供できるように学び、実践する。 ・アセスメントツールを用いて、介護計画を立案し、介護チームや他職種と協働で実施し評価する。
[使用テキスト・参考文献]	・介護福祉士養成講座 「介護総合演習・介護実習」 中央法規 ・介護実習指導要綱
[単位認定の方法及び基準]	・教科出席率が80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。 1. 査点(80%) 到達目標の修得状況を測るために、各回で実施した確認テストを編集した期末査査により算出する。 2. 平常点(20%) ・日々の授業に対しての取り組み方、参加態度などを含め評価する。(10%) ・提出課題において、期日を厳守し到達目標に達している点を価する(10%)。

授 業 概 要

(介護福祉科)

授業科目名 介護総合演習Ⅱ－1		授業の種類 (☒ 講義 ・ 演習 ・ 実習)	
授業担当者 伊東 美子	実務経験	特別養護老人ホームにて、介護福祉士として介護業務に従事する。	
授業の回数 15 回	時間数 (単位数) 30 時間 (2 単位)	配当学年・時期 2 年・前期	(☒ 必修 ・ 選択)
[授業の目的・ねらい] 介護実践に必要な知識と技術の統合を行うとともに、介護観を形成し、専門職としての態度を養う学習とする。 [授業全体の内容の概要] 各領域で学ぶ知識と技術の統合、介護実践の科学的探究を通して、介護実習での学びを深化させるとともに、介護の専門職として思考や態度の形成、自己教育力を養う総合的な学習とする。 [授業終了時の達成課題 (到達目標)] ① 多職種協働の視点が理解できる ② 様々な実習を通して、自己の課題を明確にし、専門職としての態度を養うことができる ③ 質の高い介護実践やエビデンスの構築につながる実践研究の意義とその方法について理解できる			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 (15 回までの場合はセル結合)			
コマ数：15 コマ 1. 実習Ⅱの概要説明・実習計画書・誓約書の作成 2. 実習Ⅱ 実習計画書の作成① 3. 実習Ⅱ 実習計画書の作成② 4. 実習Ⅱ 記録類の配布と実習前の確認・指導 5. 実習記録まとめ 6. 実習記録まとめ 7. 実習記録まとめ 8. 実習記録まとめ 9. 実習Ⅰ－4 概要説明 実習計画書・誓約書の作成 10. 実習Ⅰ－4 実習計画書の作成 オリエンテーション内容の確認 11. 実習Ⅰ－4 実習計画書の作成 12. 実習Ⅰ－4 実習計画書の作成 13. 実習Ⅰ－4 記録まとめ 14. 実習Ⅰ－4 記録まとめ 15. 実習Ⅰ－4 記録まとめ			
[使用テキスト・参考文献]		・最新 介護福祉士養成講座 10 介護総合演習 中央法規出版 ・プリント配布	

[単位認定の方法及び基準]	・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。 1. 査点(80%) 到達目標の修得状況を測るために、各回で実施した確認テストを編集した期末査により算出する。 2. 平常点(20%) ・日々の授業に対しての取り組み方、提出物、参加態度などを含め評価する。
----------------------	--

授 業 概 要

(介護福祉科)

授業科目名 社会と制度の理解Ⅱ－1		授業の種類 (☒ 講義 ・ 演習 ・ 実習)	
授業担当者 安藤 清彦	実務経験	障害者支援施設等で、社会福祉士として相談支援等の業務に従事する。	
授業の回数 15 回	時間数 (単位数) 30 時間 (2 単位)	配当学年・時期 2 年・前期	(☒ 必修 ・ 選択)
[授業の目的・ねらい] 1 「障害者の制度」では、制度の歴史と変遷、しくみについて理解する。 2 「介護実践に関連する諸制度」では、介護福祉士として様々な制度を理解する。 上記 1. 2 を目的とし、介護福祉士として利用者に必要な制度やサービスを他の専門職や機関と連携することができるようになることをねらいとする。 [授業全体の内容の概要] 社会の理解では、生活の基本機能とライフサイクルの変化及び家族、社会、組織、地域社会の概念を理解する。その上で、地域社会における生活支援について学び、地域共生社会の実現に向けた制度や施策、社会保障制度、社会福祉と介護保険制度、障害者福祉と障害者保健福祉制度や他の介護実践に関連する諸制度にどのようなものがあるかを具体的に学ぶ。 [授業終了時の達成課題 (到達目標)] 1 障害者総合支援法について、制度の解説にとどまらず、その背景や理念が説明できる。 2 介護を実践していくうえで必要な様々な諸制度がわかる。 3 1. 2 年で学習した「社会と制度の理解Ⅰ・Ⅱ」について、その学習を振り返ることで知識修得確認を行うことができる。			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数			
1 障害者の自立 2 障害者自立支援制度創設の目的と動向 3 障害者頃津支援制度のしくみ 4 障害者自立支援制度にかかわる組織とその役割 5 障害者福祉施策のゆくえ 6 人々の権利を擁護する諸制度① (日常生活自立支援事業) 7 人々の権利を擁護する諸制度② (成年後見制度) 8 人々の権利を擁護する諸制度③ (苦情解決の制度・第三者評価の制度) 9 人々の権利を擁護する諸制度③ (虐待防止の諸制度) 10 人々の権利を擁護する諸制度④ (障害者差別解消法・個人情報保護法) 11 保健・医療にかかわる法と諸施策① 12 保健・医療にかかわる法と諸施策② 13 生活保護法① 14 生活保護法② 15 福祉・医療にかかわる諸制度のまとめ・			

[使用テキスト・参考文献]	・「最新 介護福祉士養成講座② 社会の理解」 (中央法規出版) ・プリント配布
[単位認定の方法及び基準]	・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。 1. 査点(85%) 到達目標の修得状況を測るために、各回で実施した確認テストを編集した期末査により算出する。 2. 平常点(15%) ・授業への参加状況では発言回数が複数回である点を評価する。(5 %) ・提出課題において、到達目標の 6 割以上に達している点を評価する (10%)。

授 業 概 要

(介護福祉科)

授業科目名 人間関係とコミュニケーションⅡ		授業の種類 (☒ 講義 ・ 演習 ・ 実習)	
授業担当者 栄 千恵子	実務経験	神経内科クリニック、教育研究所等で心理カウンセラーとして勤務。	
授業の回数 15 回	時間数 (単位数) 30 時間 (2 単位)	配当学年・時期 2 年・前期	(☒ 必修 ・ 選択)
[授業の目的・ねらい] 介護の質を高めるために必要な、チームマネジメントの基礎的な知識を理解し、チームで働くための能力を養う学習とする。 [授業全体の内容の概要] チームマネジメントでは、ヒューマンサービスとしての介護サービスの特徴を踏まえ、チーム運営の基本や人材育成の管理法の基礎を学ぶ。 [授業終了時の達成課題 (到達目標)] ・介護実践をマネジメントするために必要な組織の運営管理、人材の育成や活用等の人材管理、それらに必要なリーダーシップ・フォロワーシップ等、チーム運営の基本を理解できるようにする。			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数			
1. チームマネジメントに必要な組織の運営管理① 2. チームマネジメントに必要な組織の運営管理② 3. チームマネジメントに必要な組織の運営管理③ 4. まとめ 5. 人材の育成や活用等の人材管理① 6. 人材の育成や活用等の人材管理② 7. まとめ 8. 人材管理に必要なリーダーシップ・フォロワーシップ① 9. 人材管理に必要なリーダーシップ・フォロワーシップ② 10. 人材管理に必要なリーダーシップ・フォロワーシップ③ 11. まとめ 12. チーム運営の基本の理解① 13. チーム運営の基本の理解② 14. まとめ 15. まとめ			
[使用テキスト・参考文献]		・「最新 介護福祉士養成講座① 人間の理解」(中央法規出版)	

[単位認定の方法及び基準]	・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。 1. 考查点(85%) 到達目標の修得状況を測るために、各回で実施した確認テストを編集した期末考查により算出する。 2. 平常点(15%) ・授業への参加状況では発言回数が複数回である点を評価する。(5%) ・提出課題において、到達目標の6割以上に達している点を評価する(10%)。
---------------	--

授 業 概 要

(介護福祉科)

授業科目名 生活支援技術Ⅲ— 1		授業の種類 (☒ 講義 ・ 演習 ・ 実習)	
授業担当者 伊東 美子	実務経験	特別養護老人ホームにて、介護福祉士として介護業務に従事する。	
授業担当者 元井 信明	実務経験	ケアサポート長岡等で看護師として看護業務に従事する。	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間 (2単位)	配当学年・時期 2年・前期	(☒ 必修 ・ 選択)
[授業の目的・ねらい] 尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から本人主体の生活が維持できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する。 [授業全体の内容の概要] ICFの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、自立に向けた居住環境、移動、身支度、食事、入浴、清潔保持、排泄、家事、休息、睡眠、人生の最終段階における介護、福祉用具の意義と活用について基礎的な知識や技術を学ぶ。 [授業終了時の達成課題 (到達目標)] ① 障害についての具体的な支援内容・支援方法が理解できる ② 障害や疾病によつての困りごとに対して介護福祉士としてのかかわり方が理解できる ③ 障害や疾病のある人のさまざまな暮らしや思いを理解でき、尊厳の保持や自立支援の考え方ができる			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 (15回までの場合はセル結合)			
コマ数：15コマ 1～10 元井 信明 1. 肢体不自由に応じた介護 2. 視覚障害に応じた介護 3. 重複障害に応じた介護 4. 内部障害【心臓機能障害に応じた介護】 5. 内部障害【呼吸器機能障害に応じた介護】 6. 内部障害【腎臓機能障害に応じた介護】 7. 内部障害【膀胱・直腸機能障害に応じた介護】 8. 内部障害【小腸機能障害に応じた介護】 9. 内部障害【HIVによる免疫機能障害・肝臓機能障害に応じた介護】 10. 重症心身障害に応じた介護 11～15 伊東 美子 11. 聴覚・言語障害に応じた介護①			

1 2. 聴覚・言語障害に応じた介護②（手話を学ぶ） 1 3. 聴覚・言語障害に応じた介護③（手話を学ぶ） 1 4. 聴覚・言語障害に応じた介護④（手話を学ぶ） 1 5. 聴覚・言語障害に応じた介護⑤（手話で発表会）	
[使用テキスト・参考文献]	最新 介護福祉士養成講座 8 生活支援技術Ⅲ 中央法規出版
[単位認定の方法及び基準]	・教科出席率が 80％以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。 1. 考查点(90%) 到達目標の修得状況を測るために、各回で実施した確認テストを編集した期末考查により算出する。 2. 平常点（10%） 授業への参加姿勢、態度を評価する。

授 業 概 要

(介護福祉科)

授業科目名 生活支援技術Ⅳ		授業の種類 (講義 ・ 演習 ・ 実習)	
授業担当者 伊東 美子	実務経験	特別養護老人ホームにて、介護福祉士として介護業務に従事する。	
授業担当者 大橋 政雄	実務経験	専門学校専任教員に従事する。	
授業担当者 吉村 寿子	実務経験	特別養護老人ホーム等にて、理学療法士としてリハビリ業務に従事する。	
授業の回数 30回	時間数(単位数) 60時間(4単位)	配当学年・時期 2年・前期	(必修 ・ 選択)
[授業の目的・ねらい] 尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から本人主体の生活が維持できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する。 [授業全体の内容の概要] ICFの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、自立に向けた居住環境、移動、身支度、食事、入浴、清潔保持、排泄、家事、休息、睡眠、人生の最終段階における介護、福祉用具の意義と活用について基礎的な知識や技術を学ぶ。 [授業終了時の達成課題(到達目標)] ① 介護福祉士に必要な栄養や調理の知識や技術が理解でき、実践できる ② 介護福祉士における生活リハビリテーションについて、理解でき実践できる ③ 利用者主体を実践している施設や事業所を訪問し、個別ケアのありかたを理解できる			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 (15回までの場合はセル結合)			
コマ数：30コマ 【利用者の状態に応じた食事の介助の理解と選択】 1～10 大橋 政雄 1. 料理の基本の理解 2. 調理実習① 3. 介護施設の食事の理解 4. 調理実習② 5. 咀嚼・嚥下対応食の理解 6. 調理実習③ 7. 病院食の理解 8. 調理実習④ 9. 減塩食の理解 10. 調理実習⑤			

【介護の現場でのリハビリテーション】

11～20 吉村 寿子

11. リハビリテーションとは
12. リハビリテーションと介護
13. 介護施設で行われているリハビリテーション・機能訓練
14. リハビリ専門職（PT・OT・ST）との関わり
15. 人間の基本動作①
16. 人間の基本動作②
17. 関節可動域訓練とは①
18. 関節可動域訓練とは②
19. 疾患別基本技術～生活の中でできるリハビリテーション①～
20. 疾患別基本技術～生活の中でできるリハビリテーション②～

【優良施設から学ぶ個別ケア】

21. 優良施設見学の主旨説明・グループ分け
22. 優良施設の概要①
23. 優良施設の概要②
24. 優良施設の概要③
25. 優良施設見学（グループごとに見学）グループ以外は課題対応
26. 優良施設見学（グループごとに見学）グループ以外は課題対応
27. 優良施設見学（グループごとに見学）グループ以外は課題対応
28. 優良施設見学（グループごとに見学）グループ以外は課題対応
29. 優良施設見学（グループごとに見学）グループ以外は課題対応
30. まとめ

[使用テキスト・参考文献]	【介護の現場でのリハビリテーション】 見てわかるシリーズ6 実践リハビリ介護学 QOLサービス
[単位認定の方法及び基準]	・教科出席率が80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。 1. 査点(85%) 到達目標の修得状況を測るために、各回で実施した確認テストを編集した期末査点により算出する。 2. 平常点(15%) ・授業への参加状況では発言回数が複数回である点を評価する。(5%) ・提出課題において、到達目標の6割以上に達している点を評価する(10%)。

授 業 概 要

(介護福祉科)

授業科目名 発達と老化の理解 I		授業の種類 (☒ 講義 ・ 演習 ・ 実習)	
授業担当者 元井 信明	実務経験	ケアサポート長岡等で看護師として看護業務に従事する。	
授業の回数 15 回	時間数 (単位数) 30 時間 (2 単位)	配当学年・時期 2 年・前期	(☒ 必修 ・ 選択)
[授業の目的・ねらい] 人間の成長と発達の過程における、身体的、心理的、社会的変化及び老化が生活に及ぼす影響を理解し、ライフサイクルの特徴に応じた生活を支援するために必要な基礎的な知識を習得する。 [授業全体の内容の概要] 介護を必要とする人の理解を深めるため、人間の成長と発達の観点から人の一生について理解する。ライフサイクル各期（乳幼児期、学童期、思春期、青年期、成人期、老年期）における身体的、心理的、社会的特徴と発達を踏まえ、各段階に応じた生活支援のありかたを学ぶ。 [授業終了時の達成課題（到達目標）] ① 人間の成長と発達の基本的な考え方が理解できる ② ライフサイクル各期における身体的、心理的、社会的特徴と発達課題が理解できる ③ ライフサイクル各期の特徴的な疾病について理解できる			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 (15 回までの場合はセル結合)			
コマ数：15 コマ 1. 成長・発達の考え方 2. 成長・発達の原則 3. 成長・発達に影響する要因① 4. 成長・発達に影響する要因② 5. 発達理論 6. 発達段階と発達課題 7. 身体的機能の成長と発達 8. 心理的機能の発達 9. 社会的機能の発達 10. 老年期の定義 11. 老化とは 12. 老年期の発達課題 13. 老年期をめぐる今日的課題① 14. 老年期をめぐる今日的課題② 15. まとめ			

[使用テキスト・参考文献]	・最新 介護福祉士養成講座 1 2 発達と老化の理解 中央法規出版 ・プリント配布
[単位認定の方法及び基準]	・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。 1. 査査点(80%) 到達目標の修得状況を測るために、各回で実施した確認テストを編集した期末査査により算出する。 2. 平常点(10%) ・日々の授業に対しての取り組み方、提出物、参加態度などを含め評価する。 3. 小テスト（確認テスト含む）（10%） ・確認テストの点数により算出する。